

目次(2) コラム目次

- | | | |
|------|------------------------------|-------|
| コラム1 | 私の願い……文法を化学のような科学に | (27) |
| コラム2 | 二重主語の形容詞も多い | (28) |
| コラム3 | 葛飾は柴又の生まれ | (54) |
| コラム4 | すべての格、言語要素を数え上げるという課題 | (66) |
| コラム5 | 英語は前置詞、日本語は後置詞 | (190) |
| コラム6 | 「ここ <u>で</u> いてください」となぜ言わない? | (280) |

置に置かれる。異なる主体が同一属性の上に立つのであるから、これも複主体の構造である。実体(学生)の立つ格を「時差主格」とし、ここに立つ主体を「時差主体」「時差(主体)主語」とし、数量実体(3人)の立つ格を「数量主格」とし、ここに立つ主体を「数量主体」「数量(主体)主語」とする。

C1-84) 学生①は3人~~が~~走る。(図C1-49)

C1-85) 学生①は3人~~が~~は走る。(図C1-49)

のように「は」を付けることもできる。このとき数量(主体)主語に「は」の付いた「3人~~が~~は」では「3人」を「2人」や「5人」「10人」等との「対比」においてとらえており、「少なくとも3人」の意味になっている。

以上のように、本文法ではすべての「が」格詞で示される格は、「主格」であると考えている。(このC 1 章は前著の要約的記述なので、分かりにくいかもしれない。改めて前著に当たっていただければと思う。)

コラム 1 私の願い……文法を化学のような科学に

私には1つの大きな夢がある。1つであって2つではない。(日本語)
文法を化学のような科学にするという夢である。

日本語の文法はすでに研究しつくされており、これから若い研究者が入っていく余地はない、と考える人もいる。先人たちの行っていた研究方法を探るならば、そうかもしれない。しかし、その方法は唯一の正しい方法とはいはず、非常に日本の要素がある。

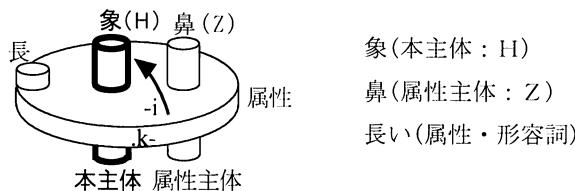
日本語の文法は言語学の基本どおりに正確な形態素分析を行うのがよく、それらの形態素が構造を作り上げる原則を見いだすのがよいのである。構造の基本は非常に単純で、実体(名詞的なもの)と属性(動詞、形容詞等)とそれを関係づける「格」によって構成されていて、立体モデルで示すことができる。テンス・アスペクト等もモデルによって容易に把握できるようになる。

私は還暦はとうに過ぎた。「文法を化学のような科学にする」という夢を若い研究者に託したいと思う。

コラム2 二重主語の形容詞も多い

日本語では形容詞で名詞を修飾する際、形容詞だけでは意味が曖昧になることがある。①「長い象」、②「遠い彼」がその例であるが、③「多い彼」、④「ない私鉄」となると意味不明に近くなる。

①「長い象」は「象は鼻が長い」(図Cコ2-1)という二重主語(二重主格)の構造を持っていて、形容属性(長い)のみで本主体(象:H)を修飾するためにこの曖昧な表現になってしまふのである(『文法』第19章〔特徴2〕参照)。この構造では「象(H)」という本主体が「鼻(Z)が長い」という単位構造全体を属性としているので、「鼻(Z)の／が」を補って、「鼻(Z)の／が長い象(H)」としなければならない。



図Cコ2-1 象は鼻が長い(naga.k-i) (kは発音されない。)

②「遠い彼」は「彼(H)は家(Z)が遠い」の構造を持つので、「家(Z)の／が遠い彼(H)」としなければならない。③「多い彼」、④「ない私鉄」は、③「口数(Z)の多い彼(H)」、④「スト(Z)がない私鉄(H)」とする。

一方、⑤「美しい彼女(H)」、⑥「おいしい魚(H)」などの意味が明瞭な形容詞では、属性主体(Z)が一定のもの(容姿・味)に固定していると考えられる。それで、わざわざ属性主体(Z)を言う必要がないのである。「彼の車は(色が)白い」「ここは(気温感覚が)暑い」も同じである。

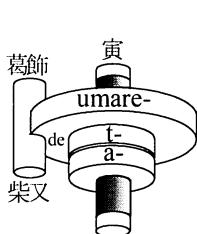
このようなことから、日本語の形容詞は二重主格の構造において使用されているものも多いと考えられる。属性主体(Z)が自明の形容詞は「Z」を言う必要がないか、単主語で使用されるのである。そう考えると形容詞の、特に名詞修飾の場合の説明がしやすくなる。

コラム3 葛飾は柴又の生まれ

C3.2.2において、次の文の構造は図C3-22であるものと考えた。

C3-45(再掲) 葛飾(A)は柴又(B)で生まれた。

この文の構造を改めて詳しく表示すれば、図C3-1のようになる。



図C3-1 葛飾は柴又で生まれた

(動詞「生まれる umare-」はここでは1詞として扱うが、実は3詞 um-ar-e-である。)

この文に関連して、ここで

C3-1) 寅さんは葛飾(A)は柴又(B)の生まれだ。

という文にも触れておく。この文の主述の関係は次のように分析できる。

C3-2) 寅さんは〔葛飾(A)は柴又(B)の生まれ〕だ。

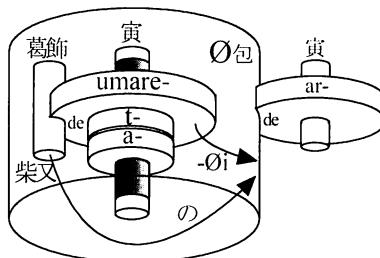
この分析を構造図で表せば、図C3-2のようになる。

包含実体「 \emptyset 包」の中には図C3-1の構造がそのまま入っている。

動詞 umare- が実体修飾第2描写詞(-i) (C5.6⑧)で包含実体 \emptyset 包 を修飾することにより umare- \emptyset i= \emptyset 包 「うまれ」という実体(名詞)が形成される。

さらにその構造の実体「柴又」が「のつなぎ」(『文法』36.1/A16.1)で包含実体を修飾して「柴又(で)の umare- \emptyset i= \emptyset 包」を構成する。「葛飾」はその前に包含実体を修飾して「葛飾(で)の umare- \emptyset i= \emptyset 包」を構成するが、主題化して「は」を取り、すぐにより限定性の高い「柴又」に置き換えられて、全体で「葛飾(で-)のは柴又(で)の umare- \emptyset i= \emptyset 包」となる。

このようにして「寅さんが葛飾は柴又で生まれた」事象が実体(名詞)化され、この事象が改めて「寅さん」の属性として「-de=ar-」で表現されて、C3-1) が成立する。



図C3-2 葛飾は柴又の生まれだ

コラム4 すべての格、言語要素を数え上げるという課題

C3.1.4 で、こう述べた。

「を格」といっても、「を格」は「を1格」「を2格」「を3格」「を4格」

……のような異なる格の集合体であると考えざるを得ない

つまり、「を格」の中にはいくつもの論理関係(=格)があるということである。「を格」を取る動詞の数だけその関係が存在するはずだから、総数は相当な数に上るだろう。しかも、C3.1.4 で「みる」という1つの動詞の「を格」の論理関係が2つあることを見て、1つの動詞に複数の「を格」の論理関係があることを知った。ということは、動詞の数だけどころではなく、動詞の数の何倍もの論理関係があるはずであるということになる。中には動詞どうしで共通の論理関係もあるだろうから、その重複の分は差し引くことにはなるが。

いったいそのような「を格」のすべてを取り上げ、数を数え尽くすことはできるのだろうか。どのようにすればそれが可能になるのだろうか。

「を格」だけではない。すべての格はいったいいくつあるのか。「格」とは実体(名詞)と属性(動詞、形容詞等)の論理関係であるから、モノ・コトが動きや、存在様態とどのように関わっているのかを調査すればよいはずである。その際、その関わり方の法則が見つかれば、労多い調査をしなくとも、自動的に数え上げができるようになるはずである。そのような法則はあるのか、ないのか。どのようにすれば見つかるのか。

アメリカ海軍天文台の USNO-A2.0 星表には、もちろんすべての天体というわけではないが、それでも5.26億個の恒星のデータが掲載されている。日本語、というより人間の認識・思考に何千とあるであろう格にもそれぞれの特徴にちなんだ記号をつけることができれば、すべての格が体系的に把握できることになる。

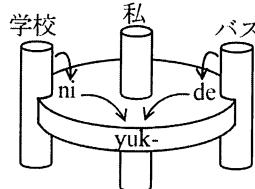
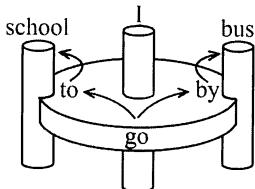
格だけではない。さらに、すべての詞・語・連語・句・文型等の言語要素にも記号づけが可能となれば、1言語の総体が体系・構造として把握できるようになり、言語研究を進める上で大きな助けとなるだろう。

コラム5 英語は前置詞、日本語は後置詞

例として、英語と日本語の対応する単純な文を構造図と共に掲げる。

Cコ5-1) I go to school by bus. (図Cコ5-1)

Cコ5-2) 私は 学校に バスで 行く。 (図Cコ5-2)



図Cコ5-1 I go to school by bus. 図Cコ5-2 私は 学校に バスで 行く。

格(名詞と述語の論理関係)は、英語では“to”, “by”で表され、日本語では「ni に」, 「de で」で表されている。

格は名詞と動詞（この例での述語）の論理関係を表すものだから、
「名詞と動詞の間」に置かれる。英語の場合、動詞(go)は主語の後に、そして、主語以外の名詞より前に位置する。日本語の場合、動詞(行く)はすべての名詞より後の、文末に位置する。それで、「名詞と動詞の間」ということは、次の□の位置ということになる（図中の矢印参照）。

英 語 動詞 □ 名詞 (go to school)

日本語 名詞 □ 動詞 (学校 に 行く)

また、格を名詞との位置関係で表示すれば下線部のようになる。

英 語 動詞 □ 名詞 (go to school)

日本語 名詞 □ 動詞 (学校 に 行く)

つまり、英語では格表示形式(to)が名詞より前に置かれ、「前置詞」となり、日本語では格表示形式(に)が名詞より後に置かれ、「後置詞」となる。この原則は名詞の数が増えても変わらない(Cコ5-1, -2) 参照)。

格表示形式は、語順が SV-O, V-SO の言語では前置詞となり、SO-V の言語では後置詞となる傾向がある。上述の理由によるものと考えられる。(この3種類の語順が世界の全言語の90%を占めると言われている。)

C12.5 章のおわりに

モダリティについて「構造伝達文法」の視点から考えようとする場合には、以上に示した6要素が基本になるようである。これですべてが扱えるかどうかを明らかにすることは今後の考察にまつことになる。より適切なモデルが実現できるよう、考察を進めていきたい。

しかしともかく、現段階で明らかなことは一般にモダリティと考えられているものが性格の異なる6要素それぞれの中に分散して関わっていることである。それらを「モダリティ」という一つの概念のもとに統括する必要があるのかどうか、それが可能であるのかどうかについて疑問が生じる。本文法の視点からは先行諸研究とは異なる位置づけにおいて扱うことになることが予測される。

本章においては、今後考察を進めていく上で指針となる基本的な考え方を示したことになる。

コラム6 「ここでいてください。」となぜ言わない？

現代語の格詞「で」は次のような歴史的変化によって生まれた。(詳しいことは『文法』11.5「『で格』の誕生」を参照されたい。)

川一に	<u>し</u> て	(上代)	意味：川にありて、川において
	↓		nite
川一に	<u>て</u>	(奈良後半～平安)	n te ↓
	↓		n de ↓
川一	<u>で</u>	(平安中期～現代)	de

つまり、「で」は「にして」(にありて)の意味であり、「で」の中にはすでに「存在して」の意味が入っている。それで「ここくで>」というときは「ここくに存在して>」の意味になっているので、この後に「いてください」を続けると「いる(存在表現)」がだぶって冗長になるのである。このため、「ここくで>いてください。」と言えないのである。

「一にして」は今日でも、「今にして思えば……」(今にありて思えば)、「四十にして惑わず」(四十にありて)のような形で使用されている。

「においがする」も元来は「においがある」の意味であると考えられる。